

～唐津城石垣再築整備事業に伴う文化財調査～

# 「唐津城跡」 天守台文化財調査 現地説明会 平成26年1月19日 (日)

## ★石垣解体工事と文化財調査成果のポイント★

### ①天守台石垣の解体工事

昭和41年に鉄筋コンクリートで建設された模擬天守を残したまま、その下の天守台石垣を解体しました。今回のような一般的な方法とは異なる石垣解体工事は前例がなく、全国初の工法です。

### ②旧石垣の発見

天守台南面石垣（7面石垣）の直下で、古い石垣（旧石垣）を発見しました。古い石垣を利用して、その上に現在の天守台石垣が築かれています。また、2年前の調査で発見した天守台南側（7面下調査区）と天守台東側（9面調査区）の旧石垣の延長部分を検出しました。3つの石垣は、いずれも唐津城最古の石垣と考えられます。

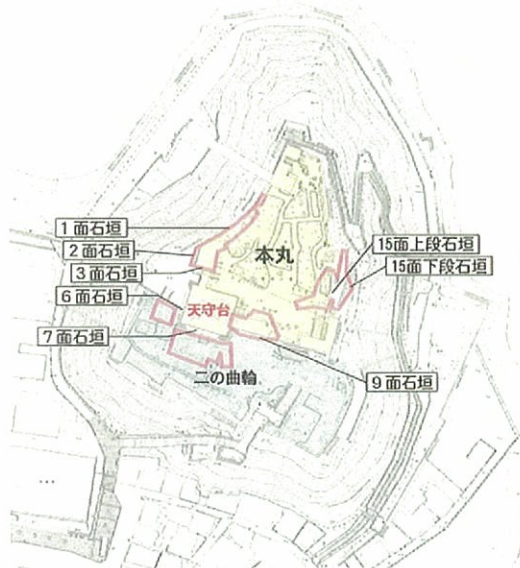
### ③天守台への大改造

天守台の直下の旧石垣の上に天守台が築かれていることから、旧石垣から現在の天守台石垣へ積み替えられていたことが明らかになりました。唐津城築城の状況を知る上で、重要な発見となりました。

## ○調査に至る経緯○

唐津城の石垣は築城されてから400年が経過し、石材の劣化や石垣の平みなどが目立つようになってきました。平成17年には、石垣修復に携わる関係者からの指摘もあり、唐津市では約3年をかけて総合的な調査を実施することとなりました。またそれと並行して専門委員会を立ち上げ、土木工学や文化財など様々な視点から、石垣修復の方向性や方法についての検討を重ねてきました。

その成果を受けて、平成20年度から石垣再築整備事業が始まりました。まず15面調査区（15面上段・下段石垣とその掘削予定範囲）を対象に平成20年10月から事前の発掘調査を、平成21年3月から6月まで15面上段・下段石垣の解体を行い、今後の石垣修復に必要な仮設作業道を設置しました。平成21年10月からは1面調査区（1～3面石垣とその掘削予定範囲）の発掘調査に着手し、平成22年4月から平成23年6月まで石垣の解体工事を行っています。さらに平成22年5月から9面調査区（9面石垣とその掘削予定範囲）で発掘調査を行い、引き続き平成22年11月から平成23年7月まで石垣の解体工事を行っています。天守台下（6面下・7面下調査区）では、平成22年12月から平成23年10月まで発掘調査を行いました。その後、平成24年3月から、天守台石垣の解体工事に着手しています。



唐津城検校（江戸時代中期）唐津城天守閣に展示中

## ○唐津城の概要○

唐津城は、寺沢志摩守広高により、慶長七年（1602）から慶長十三年（1608）に築城されたと伝えられています。その形は、唐津湾を臨む満島山を本丸とし、南西に広がる砂丘上に二の丸、三の丸を配置したもので、三の丸の周囲には城下町が造られました。満島山を中心に、虹の松原と西の浜一帯の松原が弧を描いて東西に広がっている姿から、舞鶴城とも呼ばれています。

寺沢広高は、唐津城築城に並行して、松浦川の改修・虹の松原の植林・新田開発を行い、現代に通じる近世唐津の基礎を造りました。また、天草の富岡城築城をはじめ、近年では唐津市厳木町にある獅子城も大改修を行っていたことが明らかになり、地域の拠点づくりにも尽力しました。このころ寺沢氏は12万3千石を領する外様大名へと成長していきました。

しかし、寛永十四年（1637）に起きた島原の乱の責任をとり、天草郡4万石が没収されました。さらに、嗣子がいなかった寺沢堅高が正保四年（1647）に自害すると、寺沢家は断絶、改易となり、一時唐津藩は天領となりました。

その後、譜代大名の大久保、松平、土井、水野、小笠原と五つもの家が転封を繰り返しています。唐津藩は、長崎警護を担当した佐賀藩と福岡藩の目付役として重要な任務があり、これらの外様大名を監視する譜代大名がこれにあたったようです。

その後明治維新を迎え、明治四年（1871）の廃藩置県により、唐津藩はその歴史に幕を閉じるのです。明治十年（1877）には舞鶴公園として整備、昭和四十一年（1966）に模擬天守が建設されて現在に至っています。

## 唐津城関連の主な出来事

1591(天正19年)	肥前名護屋城築城開始。
1592(文禄元年)	肥前名護屋城完成。文禄の役開始。
1593(文禄2年)	文禄の役終戦。波多三河守親、改易。
1595(文禄4年)	寺沢広高、唐津に入封。
1597(慶長2年)	慶長の役開始。
1598(慶長3年)	豊臣秀吉死去。慶長の役終戦。
1600(慶長5年)	関ヶ原の戦い。
1602(慶長7年)	唐津城築城開始。
1603(慶長8年)	江戸幕府が開かれる。
1608(慶長13年)	唐津城完成。
1615(慶長20年)	大坂夏の陣。
1637(寛永14年)	島原の乱勃発。
1647(正保4年)	寺沢堅高自害。寺沢家断絶、改易。
1648(慶安元年)	一時天領となる。
1649(慶安2年)	大久保忠勝、播磨明石藩より入封。
1678(延宝6年)	大久保忠朝、下総佐倉藩へ転封。松平乗久、下総佐倉藩より入封。
1691(元禄4年)	松平乗昌、志摩鳥羽藩へ転封。土井利益、志摩鳥羽藩より入封。
1762(宝暦12年)	土井利里、下総古河藩へ転封。水野忠任、三河岡崎藩より入封。
1771(明和8年)	虹の松原一揆。
1817(文化14年)	水野忠邦、遠江浜松藩へ転封。小笠原長昌、陸奥楡葉藩より入封。
1867(慶応3年)	大政奉還。
1869(明治2年)	版籍奉還。小笠原長昌、藩知事となる。
1871(明治4年)	廃藩置県。小笠原長昌、免官。幕藩体制の崩壊。唐津城廃城。
1873(明治6年)	廃城令。唐津城破却か。
1877(明治10年)	舞鶴公園として整備。
1966(昭和41年)	本丸天守台に模擬天守建設。
1989(平成元年)	三の丸(市役所前)の肥後堀整備。
1992(平成4年)	二の丸に時の太鼓建設。
1993(平成5年)	三の丸に辰巳館建設。
2008(平成20年)	唐津城石垣再築整備事業開始。



# 天守台石垣(6~8面石垣)解体工事

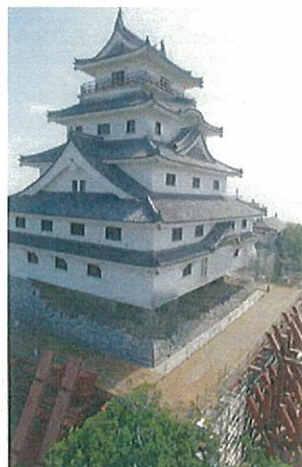
## ○全国初の大事業!

唐津城では、天守閣は築かれなかったと言われていました。江戸時代に描かれた絵図を見ると、天守台石垣は描かれているものの、その上の天守閣建物を描いたものはありません。江戸時代を通して天守台石垣のみの状態であったようです。

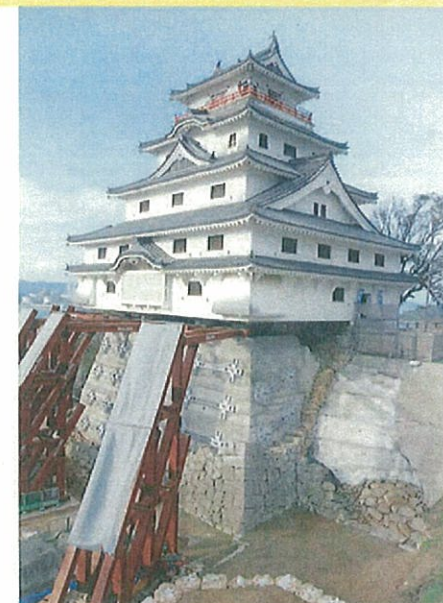
現在の唐津城天守閣は、昭和四十一年(1966)に建設された模倣天守です。16本(4本×4列)におよぶ円柱状のコンクリート基礎杭が、天守閣を支えています。建物の重量が石垣には全くかかっていないことから、天守閣建物とコンクリート基礎杭を残したまま、天守台石垣のみを解体・積み直す工法で、修復を行っています。

石垣天端から2~3mでは、石垣石材や栗石が取り払われて、コンクリート基礎杭が露出しています。このため、天守閣の南側は一部が宙に浮いたような状態になっています。

このように、天守閣建物を残したまま、その下の天守台石垣を解体する工法は前例がなく、全国初の試みです。



作業構台設置状況(南西から) 上から2m程度解体した状況



解体した天守台石垣と天守閣建物(南東から) 写真中央が天守台南東側。露出した天守閣建物の基礎杭に仮設トラスをあてがっている。

### 作業構台(足場)

石垣石材は1石ずつ取り外します。こうした解体・積み上げ作業を行うための作業構台も設置しました。解体が終わった現在では、作業構台はすべて取り外しています。

### 仮設トラス

天守閣建物の自重は、天守台石垣にかかっておらず、コンクリート基礎杭により支えられています。しかし、地震などの不測の事態にも耐えられるように、鋼材を組んで仮設トラスを造り、天守閣建物の基礎杭にあてています。この仮設トラス設置箇所では、平成23年度に発掘調査を実施しており、古い石垣や金箔瓦が見つかっています。

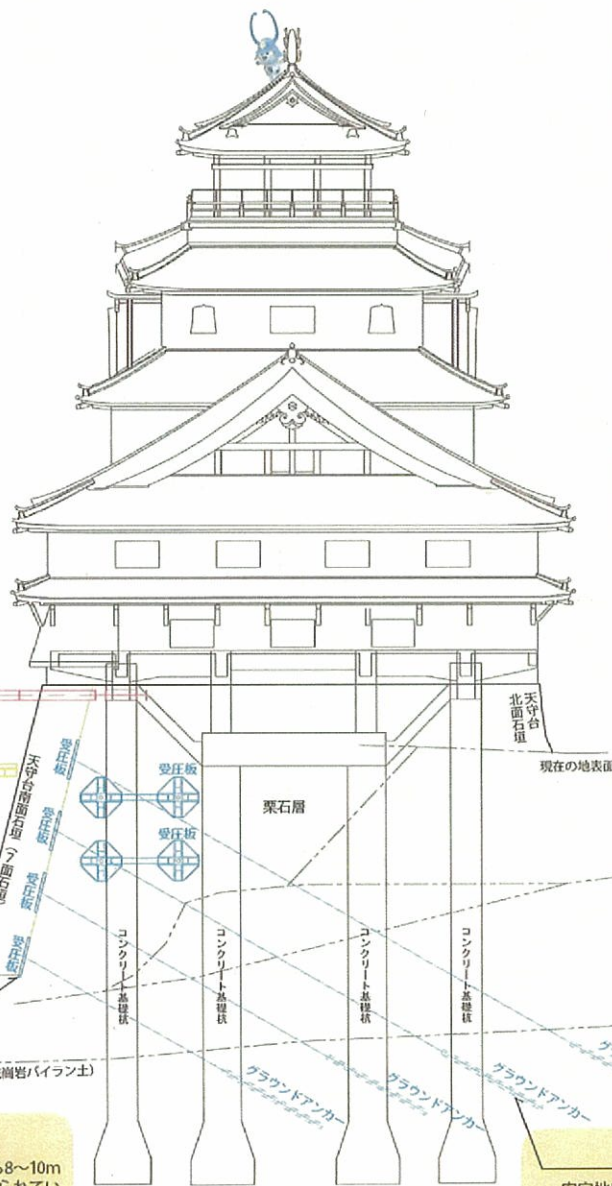


解体した天守台石垣と仮設トラス(西から) 写真中央は天守台南面石垣(7面石垣)。露出した天守閣建物の基礎杭に仮設トラスをあてがっている。石垣の裏には受圧板が並ぶ。

### 掘削法面と受圧板

天守台南面石垣(7面石垣)の裏には、石垣面から8~10mの広い範囲に、栗石と呼ばれる小振りの石材が詰められています。

不安定な栗石層を押さえるため、法面(栗石がむき出しとなった部分)にモルタルを吹き付け、グラウンドアンカーを打ち込みます。グラウンドアンカーとモルタル法面が接する場所には、八角形の受圧板をあてて固定しています。



解体した天守台石垣と天守閣建物(南西から)

### グラウンドアンカー

安定地盤と法面(モルタルを吹き付けた壁)をグラウンドアンカーで連結させています。石垣の裏には、栗石と呼ばれる小振りの石材が詰められています。この栗石がすべて崩れないように、グラウンドアンカーの引張力を利用して安定させます。アンカーの先端は、約20m下の安定地盤まで打ち込んでいます。

## 天守台の旧石垣

### ○天守台で古い石垣(旧石垣)を発見!

7面石垣(天守台南面石垣)の東半分では、地表より約1m程下で、石垣石材の大きさや形状、加工の度合い、石垣勾配が異なっており、石垣自体の勾配も変化しています。このような状況から、地表下約1m付近を境に、もともとあった旧石垣の上部を取り外し、その上に現在見られる天守台石垣を築いたようです。現在の天守台石垣を積み直す際には、旧石垣より後ろに10～20cm程控えて積んでおり、旧石垣の上部に小段ができています。

現在の天守台石垣は、花崗岩の割石を用いた乱積みです。各石材は、ほぼ同じ大きさ・形状になるように割られています。石垣の勾配は直線勾配で反りがなく、7.7°と急勾配になっています。これに対し、天守台下部の旧石垣では、花崗岩の自然石のみを用いています。石材の形状は様々で、石垣の勾配は6.4°程度と緩やかになっています。

また、2年前の発掘調査で、7面石垣より数m南の仮設トラス下でも、南北に延びる旧石垣(7面下旧石垣)が見つかっていました。今回の調査で、その北側延長部分も見つかっており、天守台下の旧石垣まで続いていました。これらの旧石垣の接点である人間部分は鈍角になっています。



解体された天守台石垣と天守台下旧石垣(南東から)

### 天守台下の旧石垣

天守台下旧石垣は、延長約10m、高さ約1.5mの範囲で、約50石を確認しました。調査区のさらに東側まで同じように続いているようです。土に埋もれた部分では、築石と呼ばれる石垣石材の間に詰める間詰石が、良好に残存しています。間詰石の中には、少量ですが玄武岩も混じっています。

7面下旧石垣は、延長約2m、高さ約1mの範囲で、5石を確認しました。石垣勾配は6.8°程度です。

2年前に発見した7面下旧石垣の状況から想定すると、今回発見した旧石垣はともに、さらに2m下まで続いているものと思われる。



7面下旧石垣と天守台下旧石垣(東から)

### ○天守台の東側にも旧石垣!

9面石垣(天守台の東)の裏からも、旧石垣が見つかりました。この旧石垣は2年前に発見していましたが、9面石垣の解体が進み、その延長部分を今回確認しました。9面石垣は花崗岩の割石を使用した乱積みで、石垣勾配が7.8°であるのに対し、旧石垣は花崗岩や玄武岩の自然石を用いており、石垣勾配が4.8°程度と非常に緩やかな勾配です。9面石垣裏の栗石は、玄武岩丸石を用いており、10cm大の石材に加え、中には40～50cm大の大きな石材も多用しています。しかし、旧石垣の栗石には5cm以下の小隙を用いています。

9面石垣と9面石垣裏旧石垣は平行ではなく、石垣軸が約6°ずれています。旧石垣を覆うように9面石垣を築く際に、微妙に石垣軸を変えたようです。



天守台石垣(6～8面石垣)および9面石垣解体状況(南西から)

### 9面石垣裏の旧石垣

9面裏旧石垣は、延長約4.8m、高さ約2.3mの範囲で、22石を確認しました。この旧石垣は孕んでおり、全体が膨れるようにやや前に出てきています。その勾配は4.8°程度で、唐津城で最も緩やかな勾配の石垣です。西側にある天守台に向け、旧石垣はまだ続いているようです。

なお、2年前に発見した部分は、今回検出した旧石垣の東隣にあたり、現在は仮設道路設置のため、一旦埋め戻しています。



9面裏旧石垣(南から)



9面石垣と9面裏旧石垣(北から)

## 天守台の旧石垣

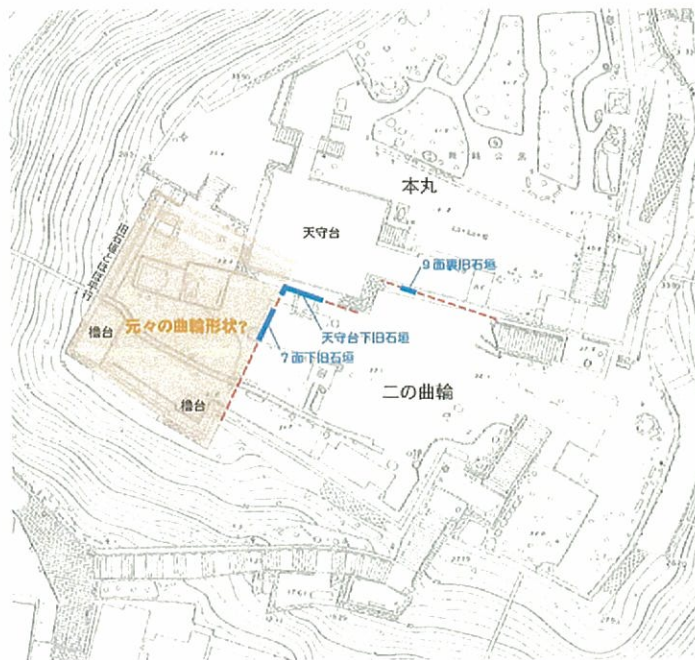
### ○3つの旧石垣

天守台一帯で発見された7面下旧石垣、天守台下旧石垣、9面裏旧石垣は、いずれも自然石を用いた石垣です。勾配も緩く、技術的に見ても現在の石垣に先行するものです。

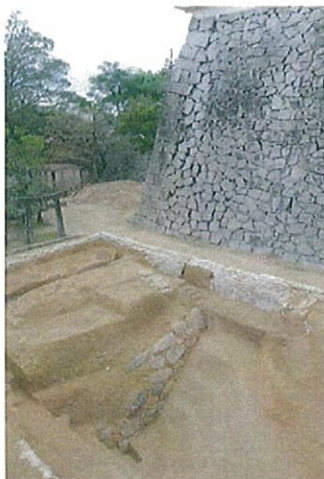
9面裏旧石垣の石垣勾配が非常に緩く、築石石材にも玄武岩が混入する点や、7面下旧石垣に横長の丸みを帯びた自然石が多い点など、わずかな相違点があり、それぞれの旧石垣に前後関係がある可能性も考えられます。しかし、前述の類似点や検出状況等から、3つの旧石垣はほぼ同じ時期に築かれたと考えられます。これらの旧石垣の配置を見てみると、元々の本丸の形が現在と全く異なっていたことが分かります。石垣は数回折れ曲がるような平面形状をなしていましたが、現在の石垣構築の際に完全に埋没しています。

このように、3つの石垣は基本的には近似したもので、唐津城で最も古い石垣と考えられます。

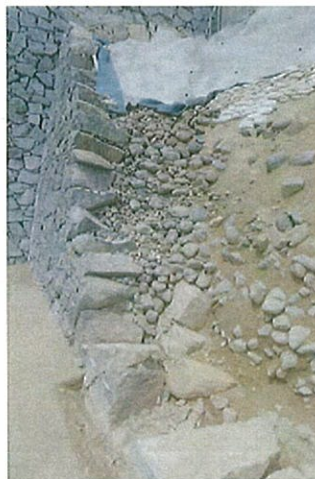
これら3つの旧石垣を廃棄して現在の石垣を築く際に、その取り扱いがそれぞれ異なっています。7面下旧石垣は、大部分の石材が取り外されています。二の曲輪南側の石垣に自然石が用いられていることから、取り外した石材は再利用された可能性も考えられます。天守台下旧石垣は、上部の石垣を取り外し、現在の天守台石垣石材が旧石垣石材にあたるように据えられています。この際に、旧石垣面より少し後ろに控えて天守台石垣を並べています。現在の天守台の基礎地盤として利用したようです。9面裏旧石垣は、9面石垣にあたる部分は取り外されているものの、埋没する部分はそのまま残っており、石垣裏の基礎として利用したようです。



旧石垣延長推定図 (S=1/1,000)



7面下旧石垣と天守台石垣 (南東から)  
※写真は2年前の調査時のもの。現在は埋め戻し済。



9面石垣と9面裏旧石垣 (南東から)  
※写真は2年前の調査時のもの。現在は埋め戻し済。



天守台石垣と天守台下旧石垣 (南から)



天守台石垣南西隅と天守台下旧石垣 (南東から)

### ○旧石垣を築いた頃の唐津城

これまで見てきたように、今回の調査で、唐津城最古と考えられる石垣が3ヶ所で見つかりました。唐津城築城は慶長7～13年(1602～1608)と伝えられています。

2年前の調査で、7面下旧石垣の裏から金箔瓦片が出土しており、この旧石垣が築かれる前に、すでに金箔瓦を用いる程の重要構造物が満島山に建てられていたようです。しかもその建物は旧石垣が築かれた時には壊されてしまっています。

旧石垣を埋めた盛土の中から、16世紀～17世紀初頭の遺物が出土していることから、17世紀初頭以降、つまり唐津藩初代寺沢氏の頃に、旧石垣を廃棄して、二の曲輪南側の石垣や天守台石垣を築く等の大改造を行い、本丸の形状を大きく変えています。

以上のことから、旧石垣を築いた頃の唐津城は、慶長7～13年(1602～1608)の築城期の初期段階にあたる可能性に加え、それ以前の文禄・慶長の役に関連する拠点を満島山に築いていた可能性も指摘されます。後者であれば、名護屋城築城または改修等に並行して、豊臣政権により満島山に何らかの拠点が築かれていたこととなります。文禄・慶長の役では、名護屋城およびその周囲120に及ぶ各大名の陣屋を本營として、壱岐の勝本城や対馬の清水山城を前衛の拠点、筑前の名島城等を後詰めの拠点として連携していたことが知られています。当時の状況から、唐津にもこの連携の一拠点として、後詰めの城が築かれていたとも考えられます。

### ○天守台への大改造

現在の天守台が築かれる以前の本丸形状は、現在とは全く異なっていました。唐津藩初代寺沢氏が、本丸一帯を大きく埋め立てて、現在の天守台や二の曲輪を造ったようです。

3つの旧石垣は上部が取り外されていることや、調査で確認できた範囲に限られていることなどから、具体的な内容は未だ謎に包まれています。

現在の天守台は高さ11.5m(旧石垣直上から12.5m)もあり、唐津城だけでなく唐津藩内で築かれた石垣の中で最も高い石垣です。天守台下旧石垣は、現在の天守台の重量を直に受ける形で再利用されています。天守台下の旧石垣を再利用したのは、重要構造物である天守台石垣を築くための工夫であったのかもしれない。

様々な可能性が想定されますが、今回の調査で、現在の天守台が築城当初ではなく、本丸の大改造の際に築かれたことが、明確に確認されました。これは唐津城築城の状況を知る上で、重要な発見となりました。旧石垣に伴う遺構の状況や年代、さらには天守台石垣の構築年代の解明など、次の課題も見えています。今後のさらなる調査進捗が期待されます。